『悪の組織アクメハート　ヒーロー人格処刑場』

「ようこそ、キミが新しく組織に加入された戦闘員さんなのですね」

　そういって、心地の良い音色の声でボクを出迎えくれた。
　事前に彼女がこの組織の『処刑場』と呼ばれる施設を取り仕切る幹部であることは聞かされている。
　彼女の恰好は、よくある戦隊モノの悪役キャラクターとそっくりだった。
　だが、一般的に知られる悪役キャラクターとは一線を画するほどに露出が激しかった。紫色のレザーブーツとグローブに、秘部を覆う桃色の布地と丈が異常に短い紫色のスカート。そして、谷間を惜しげもなく前面に押し出した豊乳。大きすぎる乳房を何とか包み込んでいる桃色のレースブラ。短めのレザージャケットをその上からボタンを留めず羽織るように着ていた。最後に、悪役キャラにふさわしい卑猥なアクセサリーが全身のあちこちを飾る。
　とてもではないが子供には見せられない姿である。それもそのはず。彼女は本当の意味での悪の組織の幹部なのだから。
　悪の組織といえば、お茶の間に流れる憧れのヒーローたちの宿敵。
　そして、子供たちに人気を博しているヒーローの数は初代から数えれば、もう三桁はくだらないだろう。彼らと共に人気があるのが、悪の組織、いわゆる悪役キャラクターたちだ。両者あってのヒーローもの、戦隊モノである。
　しかし、実際にお茶の間に放送されている戦隊モノのヒーロー番組はすべて架空の話である。そう、子供たちに夢と希望と楽しみを提供するための空想の話。
　だが、それとは別に、テレビやインターネットでは公開されないヒーローたちの戦いがあった。悪の組織とヒーローたちの戦いは、厳密に秘匿とされ、あらゆるメディアで情報操作されている。それは、一企業の番組レベルの話ではない。国家レベルでの大戦である。
　悪の組織と日夜戦うヒーローたち。
　そのヒーローたちは、実は番組の中で戦っているあのヒーローたちだ。
　たしかに番組は空想の産物。そう、ヒーローたちの対極に位置する悪の組織側は企業が作った偽物。本物のヒーローと偽物の悪役。それが番組の真実。
　そして、そういう番組はしばしば新しいヒーローたちへ次々にと変わっていく。新しいチームに、新しいヒーロー、そして新たなる敵。同じような内容で違ったキャラクター。
　それは企業側の都合なのか。はたまた視聴者からの意見によるものか。
　真実は、違った。

消えたヒーロー、ヒロインたち。そう、彼らはやられたのだ。本物の悪の組織に。
そしてボクは、その大戦の一翼を担う悪の組織のメンバーとして正式に認められた。
今日はその研修としてここを見学するように言われている。
消えたヒーロー、ヒロインたちの最後をここで知って、いかにそれが素晴らしいことかをその目で見てきなさい、と幹部の一人から仰せつかったのだ。

「では、わたくし、幹部の怪人ナーティアが本日サトル様の案内を務めさせていただきます」

そういって、ナーティアはお辞儀をする。
ナーティアの動きにあわせて、柔らかな双乳がぶるんと揺れる。その深々と刻まれた谷から目が離せなくなった。
そして、ナーティアが頭を上げると、柔らかな笑みを浮かべた。
慌てて、視線を外した。

「ふふ、どうかなされましたか」
「いえ、なにも……」
「さようでございますか」

ふと思い、一つ尋ねることにした。

「あの、ナーティア様が敬語を使う必要はないのではないでしょうか。先日、入ったばかりの新米戦闘員なので、ボクは……」
「いえいえ、だからなのですよ。悪の組織に進んで入隊してくださる方はなかなかいらっしゃいませんので。わたくしたち怪人は作られた存在。ですので、意思決定権などはありません。ですが、サトル様は御自分の意志でここに来られた。それは、わたくしどもからしましたら尊敬の値する行為なのですよ」

そういって、またナーティアは微笑んだ。紫紺の扇情的な衣装とは裏腹に、彼女の笑みは母性的な優しさを含んでいる。

「そ、そうでしたか。なんだか、そういわれると恥ずかしいな」
「ふふ、恥ずかしがることなどありません。これから、サトル様にはこの組織『アクメハート』のために役立っていただくのですから、もっと自信をお持ちください」
「あ、ありがとう……」

女性と接する機会が滅多にないサトルにとって、ナーティアからの賛辞は気恥ずかしい

ことこの上なかった。

「では、サトル様には先日捕まえました４人のヒーローたちが処刑されるところをご覧いただきましょうか。」

　そういって、ナーティアは施設の中を案内するように、ボクの前を歩いていく。その後を、同じペースでついて行く。

「ですが、残念ながら、最後の一人、リーダーのレッド君だけ取り逃してしまったのですが……」

　すっと、後ろを振り返るナーティア。その視線から目を逸らす。幾分居心地が悪かったので、話を先に進めた。

「えっと……今までのヒーロー達も今日の彼らのように殺してきたのですか」
「はい、そうですよ。ですが、サトル様の思われているような処刑とは異なります。あくまで、ヒーロー生命の処刑です。わたくしたちは殺傷の類を好みません。わたくしたちの理念は“恒久的な幸福の追求”なのです」

　そういって、ナーティアは真っ白な廊下を進んでいく。その後ろとトボトボと歩きついて行った。まるで病院のように何もない白い廊下が続き、一枚の扉の前についた。扉といっても全面を白で塗られているため、パスワード入力用のパネルがなければ扉とも気が付かなかっただろう。
　そして、ピンク色の壁一面に大小のハートマークが彩られた部屋に入った。その部屋は、二分されている。中央に大きなガラス窓がはめ込まれているからだ。そして、今いる部屋と反対側、すなわちガラスの向こう側に一人の男性が拘束用の椅子に全裸で座らされている。拘束を外そうと抵抗を続け、そしてこちらを睨めつけながら「出せ、外せ」と言っているが、自分たちに彼の焦点があっていない。

「これはマジックミラーです。そして、ここは完全防音をなっております。彼の声はマイクを通じて聞こえますが、こちら側の声は一切聞こえません。普段でしたら、処刑に際して多くの観客、怪人と戦闘員たちが見物に来るのですが、今日はサトル様のために貸し切りにしております」
「う、うん」

　なにか腑に落ちない感覚を得ながらもナーティアの説明を聞いていく。

「そして、彼、アトミックブルーこと青沢勇気。原子力の力を用いたスーツを着用する彼らアトミックレンジャーは我々に多くの被害をもたらしました。それも、我々のみならず市民の暮らす街にも彼らの力は多大なる傷を残したのです。彼らの考え方はわたくし共とは相いれないもの。ですので、これから彼を処刑します。彼に、いえ彼らに“恒久的な幸福”がいかに素晴らしいものかを知っていただき、ヒーローなどという偽善を振りかざした蛮行を止めていただくのです。では、そろそろ初めてもらいましょうか」

　そういって、ナーティアは指を鳴らすと、ガラス越しの部屋に扉が出現する。その扉の奥から二人の女性怪人が現れた。
　全身にハートマークのタトゥーが施された怪人。ピンク色の長い髪をなびかせ、淫靡な笑みをこちらに向けてきた。マジックミラーで見えないはずだが、あらかじめボクが見学に来る話を知ってのことだろう。
　その笑みも劣情を誘うには十分な卑猥さがあったが、彼女の姿はそれ以上だった。下半身を隠すものは紐のような赤いショーツのみ。むっちりとしたお尻は女性ならではのふくよかな丸みを有している。そして、何よりもその豊満な乳房が印象的だった。ナーティアの胸も爆乳の分類に入るほど豊かではあるが、彼女たちの乳房はナーティアの爆乳をはるかに凌いでいた。そして、ここから見ているだけでもわかるほど柔らかく、彼女たちが動くたびに乳房全体が波打った。

「彼女たちはこの処刑のためだけに生み出した怪人です。彼に行うのは、『ギロチンの刑』です。ギロチンと聞くととても怖いイメージが浮かぶかもしれませんが、先ほども申しましたとおりわたくしどもは殺傷の類は望みません。ですので、安心してご覧ください。そして、目に焼き付けてください、『アクメハート』に逆らったヒーローの末路を……ふふふ」

　ナーティアの浮かべた笑みは、今までの流れの中で最も淫靡で嗜虐的なものだった。

＊＊＊

「くっ！ここから、出せ！これを外せ！」

　ガタガタと椅子を揺らし、必死に拘束を外そうと試みる。だが、手首を痛めない仕様の柔

らかな拘束具であっても、今の勇気には外すことができなかった。
　アトミックスーツさえあれば、こんな拘束など簡単に引きちぎれるのに、と歯噛みせずにはいられなかった。
　また、民間人を人質にされていなければ、アクメハートの怪人に負けることなどなかった。
　そして、今ここに変身デバイスさえあれば、と。
　次々と現状に対する後悔、あるいは仮定の物語が浮かんでくる。自分がこんなにも無力だったとは思わなかった。いや、思いたくないのだ。
　唯一の救いは、未だにレッドだけが捕まっていないという事実だけ。最も、これもアクメハートの怪人から聞かされた話だから完全に信用することはできない。しかし、もしこれが嘘であったとしても、アクメハートには何のメリットもない。故にこれは真実であると勇気は考えていたのだが。
　そんな事実も虚しく、数日の監禁生活が続き、今日、処刑されるらしい。

（なんとかして、この状況を打開しなければ）

　そう、考えているところに二人の怪人が部屋の中に入ってきた。

「な！」

　勇気の口から驚きの声が飛び出した。
　とても綺麗な顔立ちをした怪人で、勇気よりも背は幾分ばかり高そうだ。しかし、勇気が驚きの声を上げたのは、彼女の美しさにではなく、その異常なまでに大きな乳に、だった。形の整った、それでいて軽い動作で波打つほど柔らかさを保った爆乳。人の乳房ではありえない造形と大きさをもつそれを、あろうことか完全に露出させた状態で現れたのだ。
　勇気はすぐに顔を伏せた。
　当然だ。思春期の、ましてや女性経験のまったくない勇気には刺激の強すぎる光景だった。
　そんな勇気の心境を知ってか知らずか、勇気の顔の位置までかがむと、おもむろに説明を始める。

「今からアトミックブルー、勇気君の『ヒーロー人格処刑』を始めます。ふふ、た〜ぷり楽しんでくださいね。項目はギロチンです♡ふふ、恐いですか。でも、大丈夫。きっと、【もっと〜、もっとしてくださ〜〜い】っておねだりしちゃいますよ♡ちゃ〜んと後で種明かししてあげるから。まずは下ごしらえに、うふふ、このローションを全身にかけていきますね♡」

　そういって怪人は、一つの瓶を手に取って見せつけてきた。

　中には白く、ドロッとした液体が入っていた。そして、怪人が蓋を開くと、甘ったるい匂いが部屋中に充満する。

「あは、いい匂い。じゃあ、ゆ〜っくりかけていきますね♡」

　すると、左肩にひんやりとした感覚がして、そのまま滑り落ちるように胸へお腹へと流れていく。そうして今度は右肩へと。右肩からツーっと垂れ流れていくローション。

（あれ？）

　そこで今までにない感覚が芽生えた。

（なんだろう、ゾクゾクする。それに、あ、熱い。なに、これ！）
「あぁ、ん、あ」

　ローションの流れた個所を中心に全身に広がる甘ったるい感覚。その感覚がどんどん鋭敏化し、熱を帯び始める。

「く、ぁぁ、何を、ぁん、」
「あら、恥ずかしいヒーローさん♡たったこれだけで、感じちゃってるんですか？いやらしいヒーローさんですね♡怪人に拘束されて感じちゃうなんて、悪い子♡お仕置きが必要ですね♡」

　そう言い、壁際まで歩いていくと、とある大きなハートマークの模様が左右にスライドして開いた。そこにはいくつもの道具がつるされている。得体のしれない棒や筒のようなもの。
　勇気には初めて見るものばかりだった。
　そして、彼女が選び取ったものはグローブだった。それを両手二人分。

「ヒーローさんへのお仕置き。処刑の前に、謝罪をしてもらいましょう♡アクメハートの皆様に逆らってごめんなさいって♡」
「そんな、こと、ぜったい、はぁ、ぁぁ、言う、ものか……」
「あらあら、これはお仕置きのしがいがありそうですね♡じゃあ、これを見ても同じことが言えるかな？」

　そして、いつの間にか手にはめていたグローブに先ほどのローションをドバドバとかけていく。黒光りのグローブが白いローションで染め上げられていった。

　そのグローブの手の平には、無数の細かい突起が。

「ほ〜ら、見てー。ツブツブいっぱいの手のひらに、た〜ぷりのローション♡これを一体どうすると思いますか？」
「まさか、うそ、ぁぁ、うそ、うそうそ、や、やめ————ぁぁあああああああ♡」

　勇気は声を張り上げて叫んだ。

「あははは、いい反応ですね♡ほら、もっともっとぬりぬりしてあげますね〜♡」
「怪人のお手々で気持ちよくなっちゃって♡ヒーロー失格ですね♡」
「やだ、やめ、やめて———ぬぉぉお、ぁあぁぁあ♡」

　ローションを塗られる場所からゾクゾクとした感覚が止まなくなり、全身が熱を帯び始めた。拘束されていなければ、ローションをかけられただけで全身をのけ反らせるほどの快感。そこに重ね塗りをするかのごとく、ツブツブの凶器を備えた四本の腕が縦横無尽に這い回る。まるで巨大な舌に舐めまわされているような……。

「ひぐっ、ぁぁぁああ、もう、もう、ぁああぁ、ぐす、ぁぁ」
「あは、泣いちゃうぐらい気持ちいいのかな♡だらしないね〜♡ヒーローがこんなことで泣いちゃうなんて。ほら、もっと鳴かせてあげましょうね。あんあん、女の子みたいに喘がせてあげる♡」

　怪人の一人がそういうと、椅子の後ろ側に回り込み、その凶悪な両手を脇の下に差し込んだ。ツブツブの手のひらがあばら骨一本一本を正確に捉えるように勇気の胸をつかむ。その動きは緩慢だったが、それゆえに快感をじっくりと味あわされる。

「ほ〜ら、ここをこうやって撫でられると♡」

　だが、次第に蠢きだした手は高速の杭打機のように前後運動を繰り返し始めた。

「ひやぁぁあぁぁぁぁっぁあああぁっぁあ♡♡♡」
「あは、ゾクゾクの快感が止まらないでしょ♡ごめんなさいって言わないと、ずっとこのままだよ♡」
「ふふ、いい声で鳴きますね。じゃあ、私はこっちを……ほら、太ももの内側、ここもと〜っても敏感な場所なんですよ♡ほら、な〜でな〜で、な〜でな〜で♡」
「あああぁぁぁぁあぁ♡♡♡ゆるじでぇ、ぁぁ、ゆる、ぁあぁぁあ♡♡♡」

　これ以上されたら本当におかしくなってしまいそうなほど勇気は追い込まれていた。辛い訓練にも、苦しい戦いの中でも耐え抜ける精神を養ったはず。だが、それは凶悪な拷問にも等しい圧倒的な快楽で押しつぶされてしまった。
　勇気は、恥も外聞も何もかも投げ捨て許しを請う。
　だが、それでも悪魔の四本の腕は止まることはなかった。

「許して？許されるわけないですよね〜。だって、勇気くんは今まで散々怪人さんや戦闘員さんをいじめてきたのですから。それに、ヒーロー君が言わなきゃいけないのは、怪人のお姉さんに【ごめんなさい】でしょ。これ以上ないほどに情けない【ごめんなさい】をしないとね♡」
「ごめん、ぁああなしゃい、ぃぃいぃいい♡♡♡」
「あはは、なんて〜？ちゃんと言えてないからダーメ♡ほ〜ら太ももの次は、お尻の穴も、な〜でな〜で♡椅子の間が割れているから、ボウヤの弱点いじめ放題♡な〜でな〜で♡な〜でな〜で♡」
「ひぎゅぅぅぅ♡ぁぁああん、ぁぁ、ぁああ、ごめん、な、さい、ごめんなさい♡ぁああぁあああぁあダメダメダメ♡♡来る、なんかゾクゾクしたのがっぁあぁあぁ、あ、あぁあ、ぁあああ♡♡♡」

　全身に電流でも流れたかのような凄まじい快感が足先から頭の天辺まで蹂躙していく。初めて味わう地獄の快楽。拘束されていることも忘れ、手足を暴れさせ、腰がガクガクと浮き、張り裂けそうなオチンチンが激しくのたうつ。
　異常な快感が通り抜けると、強烈な脱力感に見舞われた。思考が完全に回らない。手足に力が入らない。まるで魂ごと吸い取られてしまったかのような感覚。

「あはは、イっちゃったの♡怪人のお姉さん達にいじめられて、『アクメ』しちゃったの♡あはははは、本当にはっずかしいヒーローさん♡」
「あは、そんなになでなで気持ちよかったんだ♡うふふ、ちゃ〜んとごめんなさいできてえらいえらいですね♡それに上手に『アクメ』できてよかったですね♡」

　怪人の両手から解放されても、未だに全身を快感が蝕み続けていた。
　勇気にとって、これが初めての“イク”だった。絶頂をしらない幼い体には凶悪すぎる初体験である。大のおとなでも泣き叫ぶほどの快楽を与えられたのだから。

「じゃあ、そろそろ、本番♡お姉さん達の必殺技『パイズリギロチン』でヒーローさんの正義の心を『アクメ』で塗りつぶして、天国まで昇天させてあげる♡」

「ふふ、ヒーローさんは、処刑の後、もう『アクメ』の快楽しか考えられない『アクメハート』の奴隷になっちゃうのですよ♡毎日、エッチな怪人さんの与えてくれる『アクメ』のためだけに生きる幸福な日々♡」
「ぁぁ……い、ぁぁ、……いや……」

　恍惚に浸った脳でも何となく理解できた。さっきのような凶悪な快感をもう一度味あわされたら、もう、元には戻れない。

「ふふ、抗っても無駄ですよ。ボウヤにた〜ぷり塗り込んだローション。あれは、お姉さん達の母乳を濃縮した極上の媚薬♡一度味わったら、お姉さんの母乳が欲しくて欲しくて堪らなくなるエッチな毒液♡」
「体はしっかりと覚え込んでくれたみたいですし。ほら、ボウヤのオチンチン、お姉さんのおっぱい見た瞬間、こんなに硬く♡今度は、ボウヤの頭に直接♡ふふ、お姉さん達の母乳は肌の上からでもどんどん吸収されていくの。そういう風に作ってもらいましたから♡」

　一人の怪人がまた壁際に寄って行くと、先ほどとは別の大きなハートの扉を開く。
　中には、いくつもの木箱が積み上げられていた。そして、その一つを抱えて持ってくる。床に置かれた木箱。その蓋を開くと、中から乳白色の液体が詰まった円筒形のタンクが現れた。

「ぁぁ……」

　今まで使っていた瓶の何十倍もありそうな大量の母乳ローション。それがあと何十箱分もストックがあるという非情な現実。

「ほ〜ら、ボウヤの大好きなお乳ですよ〜♡まだまだた〜ぷりありますからね〜♡」

　そういって、木箱に備え付けられていたアクリル製のボールで掬うと、その中身を自分のおっぱいに満遍なくかけていく。そして、同じようにもう一人の怪人にも。

「ほら、ヒーローさんの大好きなおっぱいがミルクローションでドロドロ♡」
「ヒーローくんたら、期待のあまりにオチンポびんびんにしちゃって♡」
「ふふ、そろそろボウヤの快楽処刑を始めましょうか♡二人の魔乳怪人さんに『パイズリギロチン』されて、頭の中を『アクメ』のこと以外考えらない『アクメ奴隷』に生まれ変わらせてあげますね♡」
「快楽と絶頂のことしか考えられないとても幸福な存在♡ボウヤの人格を書き換えて、永

遠の幸福を与えてあげる♡」

　拘束され身動きの取れない勇気を挟み込むように、両サイドから魔乳が徐々に、徐々に迫ってくる。

「ぃや……ぁぁ……」

　弱弱しく声を上げ、拒絶の意志を示すもそれで彼女たちの歩みが止まるはずもなく。

「じゃあ、今までの自分にバイバイしましょうね♡」
「『アクメ』天国でぜ〜んぶ忘れさせてあげる♡」
「「せーの」」

　　むにゅむにゅむにゅ〜〜♡

「うむ――――――――――――――♡♡♡」
「あは、全身ビクンビクンって、さっそく『アクメ』しちゃってるね♡ほ～ら、頭の中『アクメ』のことしか考えられなくなっていくよ♡お姉さん達のおっぱいでぜ～んぶ忘れさせてあげる」
「おっぱいでギロチンされて、なにも考えられないですね♡ただ気持ちいい。ただ気持ちいいってことしかわからなくなっていく♡」
（気持ちいい、気持ちいい、気持ちいい、あぁあぁあぁ、『アクメ』、『アクメ』しちゃう♡♡『アクメ』きちゃう♡）

　　びくびくびくん――

「あは、『アクメ』しっぱなしだね♡でもまだ、パ・イ・ズ・リ♡、すら始まっていないよ。言ったでしょ、『パイズリギロチン』って♡」
「『アクメ』しながら頭の中をシェイクするみたいに、おっぱいでぐっちゅんぐっちゅん揉

み解して、正義の心なんてドロドロに溶かしちゃうんだから♡」
「だから、安心して『アクメ』しまくっちゃっていいからね♡ほら、いくよ〜♡」

　　ぐちゅんぐちゅんぐちゅん――♡

「あは♡おっぱいでぐちゅぐちゅ気持ちいいですか〜♡気持ちいいですよね。だって、おっぱいでこすり上げるたびに、全身がビクンビクンッて♡それに、ボウヤのおちんちんの先っぽからいやらしい先走り汁、ぴゅっぴゅって♡」
「ほら、脳ミソ蕩かして『アクメ』ことだけ、『アクメ』でいっぱい♡『アクメ』気持ちいいね♡『アクメ』さえあればもう何もいらない。ヒーロー？正義？なんだっけ、それ？もうボウヤの頭の中は快楽で染まった『アクメ』の快楽でいっぱいよね♡」
「……!!ぁ……!!」
（ぁああぁあぁ、『アクメ』♡『アクメ』、もっと、もっと『アクメ』ほしぃ♡）

「ほ〜ら、ボウヤの大好きなミルクですよ〜♡ボールにいっぱいの猛毒ミルクをおっぱいの間に〜♡あはは、いい反応ですね♡もう、『連続アクメ』止まらないですよ♡」
「いいんですよ、たっぷり気持ちよくなってくださいね♡それにおっぱいぬるぬるで滑りやすくなりましたね〜。今度は左右のおっぱい交互に♡はーい、お顔も頭もおっぱいでぐちゅぐちゅ、ぐちゅぐちゅ♡」
「うっ……あぷ……あぁ……♡」
「あはは、おっぱいで溺れちゃいそうですね〜♡ほ〜ら、ミルクも追加ですよ〜♡うふふ、溺れちゃわないように、特濃怪人ミルクい〜ぱいごきゅごきゅ飲み干さないと、ね♡」
「それにしっかりと息もしないと、おっぱいで窒息しちゃうぞ〜♡ほら、おっぱいと母乳の香りで『ミルクアクメ』ですよ♡は〜い、吸って〜♡吐いて〜♡あはは、お腹の中も、肺の中も『アクメ』でいっぱい♡『アクメ』天国ですね〜♡」
「うぷ……♡はぁ……♡ぁぁ……♡」
（『アクメ』『アクメ』『アクメ』♡♡♡はぁあぁあぁぁあぁ♡♡♡）

「さらに、とびっきりの『アクメ』をボウヤにプレゼント♡」
「ボウヤのおちんちんからザーメンどぴゅどぴゅ搾り出してあげる♡」
「『パイズリギロチン』されながら、お姉さんのたちにツブツブグローブで『シコシコギロチン』されたら射精が止まらなくなっちゃうよ〜♡」
「ぜ〜んぶ出すまで、いえ、ぜ〜んぶ出してもやめてあげな〜い♡」
「最高の快楽でヒーローだったことなんか忘れさせてあげる。ボウヤは『アクメ奴隷』なのですから♡」
「そう、『アクメハート』の怪人さんに『アクメ』させられて弄ばれる『アクメ奴隷』♡」

「もう、ボウヤは『アクメ奴隷』♡」
「そう、ボウヤはすでに『アクメ奴隷』♡」
「「だから、遊んであげる♡」」
「ほら、左からぎゅって♡」
「そして、右からもぎゅって♡」
「「はーい、シコシコ〜♡シコシコ〜♡」」

どびゅるるるぶびゅびゅぶどびゅどぶどぶどぶ———♡♡♡

「あは、出た出た、止まらな〜い♡」
「あはは、気持ちいい？気持ちいいよね♡ほらもっと出しなさい♡ヒーローだった記憶も、人格も、正義感も、使命も、ぜ〜んぶザーメンと一緒に吐き捨てましょうね〜♡」
「最高の快楽で完全に『アクメ漬け』にしてあげる♡」
「もうヒーローになんか戻れない♡戻りたくないよね♡だって、こんなすばらしい快楽を知っちゃたのですから♡」
「このまま溺れさせてあげる、毎日毎日『アクメパラダイス』♡」
「快楽がず〜っと続く幸福な毎日、『アクメハート』の『アクメ奴隷』♡」
「ほらほら、もっともっとイっちゃえ、あはは」
「もっと、もっと激しい『アクメ』で染まって、うふふ」

……♡

……♡

……♡

♡♡♡

＊＊＊

「はーい、じゃあ『パイズリギロチンの刑』で元ヒーローくんがどうなったのか、確認してみましょう〜」
「うふふ、きっと素晴らしい変身を遂げていますよ」
「「さん、はい」」

　魔乳の牢獄から解放されるアトミックブルー。サトルは、その姿を見た瞬間、無意識のうちに両手へ力が入ってしまう。

「あへぇ♡『あひゅめ』……『アクメ』、もっひょ♡……もっひょ、ひへぇ、ぁぁ♡♡♡」

　解放されてなお全身を小刻みに痙攣させ、さらなる絶頂を求めるブルー。
　あの勇敢なアトミックブルーが、これほどまでに堕とされることにサトルは戦慄した。だが、それに反してサトルの性器は異常なまで硬く勃起している。

「あぁん♡なんて素晴らしいのでしょうか。屈強で勇敢な戦士が『アクメ』の快楽に屈する瞬間、いつ見ても堪りません♡そうは思いませんか、サトル様♡」
「う、うん、そうだね……」
「そうでしょう♡だって、サトル様も……」

　ナーティアがすっと、サトル感部に手を当てる。

「ほら、ここも、こんなに大きくされて♡ヒーローくんがおっぱいで滅茶苦茶に犯されているのを見て、欲情されてしまわれたのですか♡」
「そ、そんなことは……」

　ナーティアの手がサトルのペニスをズボン越しに撫でまわす。

「いいのですよ♡だって、サトル様は『アクメハート』の一員ですから。『アクメ』の素晴らしさに心打たれるのはとてもいいことです♡」

　そして、いつの間にかボクの後ろに回り込んだナーティアの右手がペニスを握り、左手が睾丸を優しく揉みしだく。そして、背中にあの大きな乳房を押し当て、耳元から誘惑の言葉を吹き込んでくる。

「もし、サトル様が望まれるのでしたら……ちょっとだけ、そう、ちょっとだけ、体験していきませんか♡魔乳怪人の『パイズリギロチン』♡『アクメハート』の一員でしたら、後学のために、その身で知っておくのもいいかと♡」

　心なしか、ナーティアの手の動きが速く、そして激しくなっていた。

「ほら、サトル様のここだって、もうこんなに♡大丈夫ですよ、サトル様は特別ですから♡ちゃ〜んと、言いつけておきますので安心してください♡」

　そうして、ナーティアの舌がちろりと耳を舐めた。まるで、背中を後押しするように。
　その誘惑にボクは……

１、無言で小さく頷いた。
２、首を横に振り、拒絶の意を示した。